

くじら日記

太地町立博物館から



今年の春、くじらの博物館の飼育現場では、動物の命と向き合う出来事が多くありました。

4月16日午後5時55分、コブレゴンドウ「ジータ」から新たな命が誕生しました。破水から14時間半に及ぶ難産で、しかも鯨類では逆子である頭からの出産でした。あまりにも長かったため、様子を見るべきか、介入するべきか、飼育員が不安と葛藤にさいなまれた時間でした。

出産後も気を緩めることは許されません。生まれたばかりの赤ちゃんは母クジラのジータにすくい上げられるようにして水面に浮上し、最初の呼吸をしました。ジータは間髪を入れず、赤ちゃんを抱えるようにして泳ぎ始めましたが、視力も泳力もほとんどない赤ちゃんの遊泳はおぼつきません。ジータからふらっと

飼育員の思い ①



1頭1頭と向き合い、コミュニケーションをとる飼育員たち

生命と向き合う日々 喜びや不安も

離れ、プールにぶつかりそうになります。飼育員らは駆け回り、赤ちゃんが溺れないように夜通しで母子を見守りました。夜が明けると、赤ちゃんの姿をはっきりと見ることができました。小さな体に丸っこ

い頭、その一生懸命泳ぐ姿に「かわいい」、「癒やし」と飼育員から声が漏れ、ようやく顔がほころぶのでした。

また、4月20日朝、スジイルカ「アイサ」が低体温症を起こしていることに気付きました。重篤な感染症を疑い、飼育員らはアイサのもとに駆け付けました。担架で担ぎ、簡易水槽に運び入れ、尾びれの血管から抗生剤の投与と輸液療法を開始しました。飼育員は水槽を囲い、無言のままアイサと体温計に表示された数値をじっと見つめます。緊迫の空気に包まれた現場からは、「命にかかわる事態」と、飼育員の誰もが感じ取っていました。

治療を続け、2週間がたった頃、アイサの体温が戻りつつありました。血液検査からもアイサが病気に抵抗し、回復に向かっていくことがわかりました。検査結果を待っていた飼育員らはずっと呼吸を

忘れていたかのように大きく息を吸い、久しぶりに笑顔で会話が交わされました。ただ、完治にはまだ時間がかかりそうで、また気を引き締めるのでした。

「新たに誕生した命」と「失うかもしれない命」、そしてくじらの博物館で暮らす全ての動物に向き合い、目まぐるしい毎日過ごす飼育員たちは、日々何を感じているのでしょうか。国内における鯨類飼育の先駆者の1人である内田詮三氏の著書「沖縄美ら海水族館が日本一になった理由」には、「飼育屋」は、飼育動物が死ぬかもしれないという不安に常にさらされている」と記されています。

次回から、くじらの博物館の飼育員たちが抱える「思い」に触れ、掘り下げたいと思います。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)